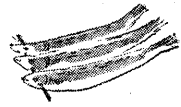


# 幼児と音楽

新幹線の窓外風景は、あまりにも速くめまぐるしく移り変わる  
ので、旅情を誘われるどころか、私たちの平静な心まで、落着か  
ないものにされてしまいます。近ごろの世相もこれに似ていま  
す。ただ普通に人間らしく生きたいだけの私たちの生活や願  
いは、そしてぬ顔の現代文明によっていつの間にかき乱され、何  
かしら不安な気分におちいらされてしまうのです。

昔から、音楽ほど直接的・本能的に人間と結びつきやすいもの  
はない、といわれてきましたが、この音楽に関しても同じような  
ことがいえましよう。私たちは、人間としてこの世に初めて顔  
を出した、赤ん坊のその瞬間から、既に産業化されたコマーシャル  
ソングや、ショー的要素の濃い流行歌のまった中にほうり出さ  
れるのです。そして「赤ちゃんのための音楽」「幼児のためのリ  
トミック音楽」「幼児の新しいうた」等々、これまた商品化され



## 加勢るり子

規格品化された、生命力稀薄な街づめ音楽を、善意ではあるが良  
識を欠いた母親の判断により、毎日ひたすら聞かされることにな  
るのです。また日がたつにつれ増大する、私たちをとりまく音楽  
環境の多様・多質なことは、世界中で、この日本が一番ではない  
かとさえ思えます。はじめにあげたコマーシャルソングや歌謡曲  
のほかにも、クラシック、ポピュラー、ポップス、ジャズ、わらべ  
唄、浄瑠璃、雅楽、民謡等々、数えあげればきりがありません。  
このような種々雑多な音楽の氾濫は、私たちの音楽環境が豊かな  
のだなどといえるていものではなく、むしろ反対に、大変危険  
な、音楽的貧困をも招きかねない混乱した状況なのだと思  
うべきでしょう。

なぜならば、純度の高い生来の聴感覚は、その機能自体がもつ  
限界の中での経過や手続きのうえにのみ、成り立ち保たれ、また

開発されるのであって、その限界を越えていたり、適応外の条件があったりする場合には、折角の機能が生かされなくなるからです。すなわち、聴感覚は鈍化し、麻痺して、音楽を想像させるにいたらず、全くの無反応状態や、拒絶反応をひきおこすような、かえってマイナスの結果を生む可能性があるのです。

人間の目には、赤外線・紫外線は受けとめられないことは常識ですが、耳にも、限界のあることはあまり知られていないようです。そこでこれから、人間の耳、聴覚について少しふれてみたいと思います。

耳は、一秒間の振動数が二十から二万サイクルの音の範囲しか受けとめることができません。またこれらを受けとめるために必要な聴覚神経は、生後八ヵ月ぐらいで整備されるといいます。

(ゼロ歳からの音楽教育や音楽治療が叫ばれるゆえんです)そして一般には、耳というものは、同種属の声を聞くことを中心に進化してきたせいで、私たちの耳は人間の音声に対して最も感度が高いなどともいわれています。

この音声に関しては、おもしろい、研究報告についての記事を読んだことがあります。これは、さる病院での赤ちゃんに対する科学的実験結果なのですが、それによると、赤ちゃんの好きな音声の一番は、母親のやさしい声で、これに続いては子どもの声に

反応を示し、父親を含む男性の声は最低で、人気がなかったそうです。興味あることは、この順位が、赤ちゃんが、これら三種類の音声と日常接する状況での、その時期・時間量・距離のそれぞれの順列に、いみじくもまさしく正比例していたことです。

もちろん、この一事例を、ただちに一般論におきかえて考えることは無理ですし、その気もありません。ただ私は、日本の母親中心の家庭環境を考えると、子どもが人間として生きて行く基本条件の一つである聴感覚に対する正確な認識をもつことは、子どもに最も大きい影響力をもつすべての母親にとって、非常に大切なことではないかと思うのです。またもう一つ、人間が本性として備えている無条件反射と探究反射の本能に関しても(《脳・行動のメカニズム》千葉康則、NHKブックス参照、聴感覚と結びつけて認識しなおしてほしいものと思うのです)。

最近ではいろいろな領域で、幼児期が、人間形成にもっとも重要な時期であることが、学問的・科学的に実証されてきました。けれども何といても、適時性に視点をあてるとき、第一に思い浮かぶのは音楽の領域ではないでしょうか。脳生理学の進歩によって、聴神経がもっとも活発に活動するのが、平均的に四・五歳の時期にあたることははっきりしたからです。まさに幼児期こそ、音楽の分野での「要<sup>かなめ</sup>」のときといえるでしょう。

そこでこの「要」のときに、耳が最も強い感覚を示す音声によつて、この時期の子どもにびつたりした音楽を与えることができれば理想的ではないか、との考えも生まれてくるわけです。

ところで、幼児にびつたりした、音声のファクターを含む音楽とは何でしょう。これが大問題なのです。

幼児にとっては、雨・風の音や、鳥の声などの自然音を聞くことも、あそびの形態の中でゆれ動くわらべ唄のふしまわしに乗ることも、もしかすると「野や山の静けさ」「夜の静けさ」までを、音の世界としてとらえることも、自由自在なのかもしれません。そして一方、ブラウン管の画像そのままの身ぶり手ぶりで流行歌をうたうことも、音やリズムのランダムな動きをジャズすることも、端正な外国人のメロディを口の端<sup>は</sup>にのせることもまた、自由自在なのかもしれません。

問題なのは、子どもの音楽に関する、現象のいろいろを判断したり、それによつてとかくの操作を行なうのは、すべて外側からの大人の目によるものであり、その大人たちは、多かれ少なかれ、わが国の明治以来の音楽教育の影響を受けてしまっている、ということなのです。この音楽教育の内容が洋楽偏重であったことは、わが国全般の文化現象からみて、やむを得ないものであったとは思いますが、現実には、一般社会や学校で、音楽だけが別格

視されていたり、「音楽はわからない」「私は音痴なので……」などの言葉に接したりすると、つくづく日本における現在の音楽の土壌について、考えこんでしまうのです。

私が経験してきたヨーロッパ諸外国では、音楽はその国の社会・生活の中に、きり離しうなく融けこんでおり、大人・子どもとの区別なしに、ただ、本物の音楽、よりよい音楽、より美しい音楽、などの表現にみあう共通のものさしで、より分けられているようでした。たとえば、自国の音楽性に根ざした音楽教育が保育園から系統的にほどこされているハンガリーでもそうでしたし、系統的とまでは行かなくても、幼稚園で自国のわらべ唄を自由に多様に活用しているフランスやドイツでもそうでした。

おそらくこれらの国々には、大人が子どもであったとき自分の見失うことなく、子どものものであると同時に大人のものであるようなものを、時間をかけて育てて行つたのにちがいありません。このことは、子どもといえどもまず一個の人間として考える思潮が、これら諸国の社会の基盤の中に、はっきり読みとれることにもかわっていると思われまふ。このような国々には、「児童文化」と「大人の文化」との間の断絶または断層があるとしてもまことに少ないように思えます。そしてそれらの土壌における本当の音楽とは、子どもにもわかるし大人にもわかる、そして他

面子どもにしかわからないし大人にしかわからない、つまり、子どもにも大人にもびったりしたものをさしているように思えるのです。

それにひきかえ、今だに、弱者である子どもを親が私物化する社会現象の絶えない、権威主義的文化風土をもつ日本には、さきにふれたような、わが国の大人の音楽の体質とあいまって、とかく、子どもの音楽生活について、真剣に考えない風潮があるようです。そこから、子どもに対してはマイナスになるような音楽環境が生じたり、結果的には無責任な、子どもにとって無理な音楽活動を強いる行為が生まれたりするというわけです。

私はある時点から、われわれ独自の日本語を持つ、日本人固有の音楽性に根ざした系統的な音楽教育を目ざして、実践の中での研究を始めました。具体的には、ハンガリーの「自国のわらべ唄とあそび」から出発するコダーイ・システムを参考にしました。

このシステムの持つ、一つ一つの理念や内容や方法を、いろいろの角度から検討し、日本の現状に合わせての演繹を試みたのです。そして試行錯誤のこの研究過程で考えさせられた最大の事柄は、ほかでもない次のことです。それは、音楽教育がどうのこうのという前に、私たち大人は、音楽と子どもへの認識と理解を、もっともっと深めて行かなければならないという、しごくあたり

まえのことでした。

本当は、何よりも、小さい子どもたちの音に対する感受性の鋭さを損なわないために、抑圧された音の世界と、配慮された音の世界の構成による、子どもの音の環境の純化が必要です。「本当は」と言ったのは、東京のような雑ばくな大都会では、このような環境は、とても急速には望めない事実がわかっているからです。

現代とは、伝統の創造的な継承を考えるとともに、国際化の潮流に従わざるを得ない時代です。しかも価値の喪失が言われ、人間疎外の不安が伴う時代でもあります。この中を生きぬくには、強じんて豊かな感性と心が何よりの支えとなります。本当の音楽を世界中から選んで幼児のときから聞かせましょう。お母さんは少しぐらい音がはずれても子守歌をどんどん歌いましょう。幼稚園では、わらべ唄的性格のものを優先してとりあげ、子どもの自発的な即興性をひき出す方向に展開させましょう。音楽は永遠のものだし、子どもには何より感動が大切です。

(コダーイシステム研究会)